

「二」次の三問(イ・ロ・ハ)から二問を選択し、設問に答えなさい。解答用紙には、選択した問題番号を明記したうえで、解答を記しなさい。漢字は常用漢字で表記してもよい。

イ 次の文を読んで、下記の問1、2に答えなさい。

昭帝立、大將軍霍光、左將軍上官桀輔政、素與陵善、遣陵故人隴西任立政等三人俱至匈奴招陵。立政等至、單于置酒賜漢使者、李陵、衛律皆侍坐。立政等見陵、未得私語、即目視陵、而數數自循其刀環、握其足、陰諭之、言可還歸漢也。後陵、律持牛酒勞漢使、博飲、兩人皆胡服椎結。立政大言曰：「漢已大赦、中國安樂、主上富於春秋、霍子孟、上官少叔用事。」以此言微動之。陵墨不應、孰視而自循其髮、答曰：「吾已胡服矣！」有頃、律起更衣、立政曰：「咄、少卿良苦！霍子孟、上官少叔謝女。」陵曰：「霍與上官無恙乎？」立政曰：「請少卿來歸故鄉、毋憂富貴。」陵字立政曰：「少公、歸易耳、恐再辱、奈何！」語未卒、衛律還、頗聞餘語、曰：「李少卿賢者、不獨居一國。范蠡遍遊天下、由余去戎入秦、今何語之親也！」因罷去。立政隨謂陵曰：「亦有意乎？」陵曰：「丈夫不能再辱。」

問1 文中の——部分を、現代日本語に翻訳しなさい。

問2 李陵の事件は、ある歴史家の生涯に大きな影響を与えました。その顛末について三〇〇字以上、五〇〇字以下で説明しなさい。

ロ 次の史料を読み、以下の設問に答えなさい。

有張保皋・鄭年者、皆善鬪戰、工用槍。年復能沒海、履其地五十里不噎、角其勇健、保皋不及也。年以兄呼保皋、保皋以齒、年以藝、常不相下。自其國皆來為武寧軍小將。後保皋歸新羅、謁其王曰、遍中國以新羅人為奴婢、願得鎮清海、使賊不得掠人西去。清海、海路之要也。王與保皋萬人守之。自大和後、海上無鬻新羅人者。保皋既貴於其國、年飢寒客澠水、一日謂戌主馮元規曰、我欲東歸、乞食於張保皋。元規曰、若與保皋所負何如。奈何取死其手。年曰、飢寒死、不如兵死快、況死故鄉邪。年遂去。至謁保皋、飲之極歡。飲未卒、聞大臣殺其王、國亂無主、保皋分兵五千人與年、持年泣曰、非子不能平禍難。年至其國、誅反者、立王以報。王遂召保皋為相、以年代守清海。會昌後、朝貢不復至。

設問① 史料の全文を現代語日本語に翻訳しなさい。

設問② 史料中にみえる「清海」とは、どこを指すものか答えなさい。またその場所がいかなる拠点として利用されたのかについても論じなさい。

設問③ 傍線部「聞大臣殺其王、國亂無主」とは、当時のいかなる状況を示しているか説明しなさい。

ハ つぎの問題A、または問題Bのいずれかに答えなさい。

設問A

- (1) つぎの史料の全文を現代日本語訳しなさい
(2) 傍線部の出来事に至るまでの経緯について説明しなさい。

査英、佛、米三國、業經互換和約、而在上海通商各小國、不無有覬覦之心。臣桂良前於八年冬間在上海時、各國曾會照會、懇請換約。雖臣等嚴詞駁斥、並將其照會原封擲還、而紛紛稟請、極為可厭、恐其故智復萌、不可不豫慮及。查該各小國在港貿易、非獨不在本年和約之內、即道光年間、江寧原定和約、亦祇有英、佛、米三國、而各小國不在其列。該夷等附英、佛夷名下通商、中國未忍驅逐、已屬格外邀恩。若有效英、佛、米之意、希圖換約、必當嚴行拒絕、以杜要求。

※☐で囲んだ字は、原文では口偏がついていることを表す。

(1)
(2)

下線部 The paradox から最後までを日本語訳しなさい。
下線部 the 1727 Treaty of Kiakhta の内容の概略を説明しなさい。

AS THE STRUGGLE for hegemony unfolded in the former Junghar borderlands in the west, a parallel but very different process was taking place in the Russian territories bordering Mongolia and Manchuria in the east. In the former, the Russian Empire's policy was tentative, acutely conscious of the limitations of its military capacity and the fragility of its footholds on the Irtysh; in the latter, the new imperial configuration enabled frontier officials like Varfolomei Iakobii to dream of epochal shifts encompassing at their outermost limits the collapse of the Qing Dynasty and the absorption of Khalkha Mongolia and Manchuria into the Russian Empire. The paradox was that the border in this region had been fixed and stable for decades. It had been mostly delimited during the preparation of the 1727 Treaty of Kiakhta. Russians—notably merchants, Cossacks, and inmates of the vast convict-labor silver mines of Nerchinsk—had been living there since the middle of the seventeenth century. Interimperial interactions on this frontier were highly regularized, with well-defined protocols for dealing with cross-border raiders and fugitives. At the same time, the Russian-subject Buriats (northern Mongols) maintained religious and family ties with the Qing-subject Khalkha, which enabled constant cross-border interaction between them. It was in fact precisely these features of the frontier that enabled the Russian Empire to construct an intelligence network that drew on dozens of agents, spies, and informers in Mongolia.

※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。
SPIES AND SCHOLARS: CHINESE SECRETS AND IMPERIAL RUSSIA'S QUEST FOR WORLD POWER
by Gregory Afinogenov, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press,
Copyright © 2020 by Gregory Afinogenov. Used by permission. All rights reserved.

「二」 次の語句の中から三つを選び、それぞれについて説明しなさい。

戸調制	ソグド人	胡服騎射	殷周革命
七支刀	異次頓	安東都護府	『三国遺事』
内務府	ハルハ・ジロム	福建船政学堂	マーガリー事件

受験番号	
氏名	カナ
	漢字

この欄以外に受験番号、氏名を記入しないこと。
漢字氏名がない場合は、ひらがなで記入すること。

———ここから記入すること———

東洋史学

総 点

(裏へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(裏へ続く)

———ここから記入すること———

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(裏へ続く)

———ここから記入すること———

——「これより先の余白には絶対に記入しない」と——